

九州における草地造成管理基準

丸岡 詮
(九州農業試験場)

MARUOKA, A.

The Standard of Grassland Improvement and
Management in Kyushu Region

九州における草地研究の歴史は浅く、成績も少ない。しかしながら過去10年の九州各県の研究成果から、不完全ながら草地造成管理基準を作ることも、現在の農業事情から意義あるものとする。

1. 草地の対象家畜と利用計画

九州の草地は古くから和牛、馬の生産の場として利用されていた。これからの農業では、馬は利用価値を失い、和牛は肉畜とならざるを得ない。和牛の安定発展は、生産地帯において肥育素牛の育成を加え、多頭化を図る必要がある。肥育素牛の育成を加え、多頭化を図る必要がある。肥育素牛の育成になれば、野草地を牧草地に造成すべきであるが、牧草地造成と肥育素牛育成の経済性については、草地の利用年限の延長が重要な問題となつている。次に乳牛であるが、現在九州では搾乳牛と草地の結びつきが極めて低く、これは部落と牧野の関係位置が大きき原因となつている。しかし実験的に宮崎県種畜場、実用的には小国村で乳牛についてはかなりの成果を収めている。したがって草地も乳牛飼養上重要な役割を占めるものと考えられる。

九州では北海道からかなりの乾草を購入している。今後は草地での乾草調製も大いに考える必要がある。

2. 草地改良の適草種

九州の草地は気象によつて低暖地と高冷地に大別できる。低暖地の適種選定について各県の試験の結果、北方型牧草は初年目の収量は多いが、維持年限が短いことがわかつた。この原因は夏枯れ現象によるもので、九農試の試験からも北方型牧草を草地に導入し、長期に利用することは技術的、経済的にかなりの困難性が推察される。しかしアルファルファ、トールフェスクなどは、他草種に比較して夏枯れ抵抗性が強く、低暖地で栽培可能な草種である。南方型牧草特にグラスグラス、バヒアグラスについては九農試、福岡、鹿児島、宮崎各県の試験の結果、収量、維持年限などの点から将来有望と認められる。

高冷地では北方型牧草が全般に生育良好である。熊本、鹿児島両県の試験ではオーチャドグラス、トールフェスク、トールオートグラス、シロクロバ、アカクロバなどが成績がよく、とくにトールフェスクは利用年限が長いので放牧地には有望な草種である。

立地上経済的に牧草を導入できない野草地については、地力の維持、野草の生産力の増進に役立つマメ科の野草の導入が適当である。四国農試の適種選定試験では、放牧地にはヤハズソウ、採草地にはツルフジバカマ、ツルマメなどが良い結果を示し、熊本、宮崎両県でも、放牧地にはヤハズソウが適していると報告している。九州の野草地には樹木が少ない。肥培、防風、庇陰、砂防などの観点より植樹が必要で、適種としてはヤマハンノキ、ニセアカシヤ、ヤマモモなどがあげられる。

3. 草地に導入する主なる牧草の栽培技術

九州の牧草の適種は前述の通りで、これらの栽培基準について述べる。

1) オーチャドグラス、シロクロバ(ラジノ型)を中心とした混播

適地および草種の組合せ：一般に高冷地に適し、低暖地では1～2年しか利用できない。組合せはオーチャドグラス、シロクロバに放牧地ではトールフェスク、レッドトップ、アカクロバ、サブクロバなど、採草地にはトールオートグラス、ライグラス類、アカクロバなどが良い結果を示している。

播種期、播種量：高冷地の秋播は8月下旬～9月下旬、春播は3月中旬～4月上旬、低暖地では秋播が9月中旬～10月中旬、春播は3月上旬がよい。播種量はオーチャドグラスa当り0.1～0.15kg、シロクロバ0.05kgに他の草種を各0.02～0.05kgを加える。

播種様式：野草の刈払、焼却ののちトラクターで耕起、整地して20～30cmのドリル播か散播を行う。播種後かるく覆土して十分に鎮圧する。

施肥量：基肥として炭カルa当り20～50kg、窒素

0.8—1.2 kg, 燐酸 0.7—1.1 kg, 加里約 1.0 kg, 追肥は利用毎に窒素 0.25—0.75 kg, 加里 0.5—0.75 kg, 燐酸は晩秋か早春に約 0.5 kg の施用を行う。

利用法：採草，放牧利用を行う。放牧は輪換放牧がよく，草丈を 30cm 以上に伸ばしすぎないことが大切である。

2) アルファルファ（ルーサン）

適地，適品種：高冷地，低暖地ともウィリアムスバーグ，ナラガンセット，ライゾーマ，デュピイが良く，佐賀，長崎の干拓地は適地である。

播種期，播種量：高冷地では8月下旬—9月中旬，低暖地では9月中下旬が最適である。播種量は条播で a 当 0.1—0.15 kg, 散播は 0.15—0.18 kg がよい結果を示している。

播種様式：一般に条播が行なわれ，畦巾 30—50 cm, 播種床はよく整地し，覆土，鎮圧を十分に行う。種子には根瘤菌の接種が必要である。

施肥量：基肥として堆肥 a 当 100—200 kg, 炭カル 40—80 kg, 窒素 0.3—0.5 kg, 燐酸 0.4—0.8 kg, 加里 1.0—1.5 kg, 追肥は窒素約 0.1 kg, 燐酸，加里おのおの約 0.5—1.0 kg, 火山灰土壌にはボロン（ホウ砂で 0.2 kg）が効果がある。

利用法：主として採草利用，初春に除草が必要である。刈取の適期は開花始，開花期が株の生存年限により結果を示す。

3) トールフェスク

適地，適品種：九州では低暖地，高冷地いづれもよく生育する。適品種としてはケンタッキー31，アルタ

があげられる。

播種期，播種量：高冷地では8月下旬—9月下旬，低暖地では9月中旬—10月中旬，播種量は a 当 0.18—0.24 kg が適当である。

播種様式：一般に 2) の播種様式と同じであるが，傾斜地では全面耕起が困難であるので，野草焼却のち播種だけ耕起するか，耕起せず全面散播で草地造成が可能である。

施肥量：基肥として炭カル a 当 10—50 kg 窒素 0.5—1.0 kg, 燐酸 0.5—1.0 kg, 加里 0.5—1.0 kg, 追肥は窒素 0.5—1.0 kg, 加里，燐酸は各 1.0 kg を施す。

利用法：主に放牧利用に適している。成熟すると嗜好性が劣る傾向があるので，草丈 20—30 cm の状態で管理する必要がある。

4) ヤハズソウ

適地，適品種：低暖地を始め，阿蘇，久住の高冷地にもよく生育する。適品種は低暖地では那系 4，8，9，1，神戸種，高冷地では阿蘇の在来，那系 2，4 が有望である。

播種期，播種量：高冷地，低暖地とも早期播種がよく，4月中旬までに蒔付種子 a 当 0.3—0.4 kg 播種すべきである。

播種様式：野草地火入れのあと全面に散播，簡単にレーキで地表をかき，鎮圧する。

施肥量：播種時に燐酸 a 当 0.6—0.8 kg, 加里 0.25—0.5 kg を施す。

利用法：放牧利用